

## 「神を父と呼ぶさいわい」

ルカによる福音書 11章 1節～4節

説 教 軽 込 昇 牧 師

神に向かって「父よ」と呼びかける祈りは、主イエス以前にはありません。イエス様がお話しくださっていたアラム語では「父よ」は「アッバ」、やっと言葉を覚えた幼子が回らない舌で「おとうちゃん」と呼びかける響きがあると言われています。

私たちが祈れない一番のネックは、「私たちが祈る相手が、果たして私を受け入れてくださるかどうかわからない。いや、受け入れてくださるはずがない。」という強い思い込みです。主イエスが「あなた方はこう祈りなさい。」と教えてくださるのは、「あなた方の祈りはすでに神様に聞き入れられている。そのために私は人間となった。そのために私は十字架にかかる。」という宣言です。

主イエスの祈りはご自身の存在をかけた神との会話であり、祈りこそが主イエスの活動の源でした。困難にぶつかるとき、厳しい判断を迫られるとき、祈りつつその道を探られました。主イエスのお言葉には抽象的なものはひとつもありません。どのお言葉にもご自身の命が込められ、祈りが込められています。

主の祈りは、主イエスが祈っておられた祈りであり、私たちも「天にまします我らの父よ」と祈るとき、主イエスと一緒に祈るのです。私たちと主イエスとが「我ら」として一緒に祈る、それが主の祈りです。

祈ることは決して当たり前のことではありません。祈りは、私たちの思いを神に向かって素直に言い表すことですが、私たちの内部には頑強な抵抗があります。日本人は神社やお寺の前で平気で手を合わせます。その意味では祈っていると言えますが、神に向かって「父よ」と祈れるかということ、祈れないし、祈らないのが私たちです。私自身も、教会に行き始めた頃、神様に向かって祈ることにはためらい・抵抗がありました。なにか弱い人間のように思えたからです。「祈ったって何になるか」という声も内部から聞こえました。

私たちの先祖がしてきた祈りは、せいぜい私たちの上にいる誰かに向かって、私たちの願いをかなえて欲しいと願うものであり、私が申し上げている、応答としての祈りとは天と地ほど違います。「祈り」は神様の「語りかけ」に対する「応答」であり、私たちの神様に対する「返事」です。森や雑踏で迷子になったとき、あな

たを探すお父さんやお母さんの叫びが聞こえてきたら、あなたはそれでもじっとしてその場に立っているでしょうか。ここにいるよ、と大声で叫び駆け出すはずで。それが祈りです。

神を信じる、それは、祈りなさいという主イエス・キリストの呼びかけです。イエス様の呼びかけはもちろん恵みであり慰めですが、同時に、あなたはなぜ祈らないのか、祈らないで人生を送ろうというのか、という問いかけです。あなたの祈りを私が受け止めてあげる、そのようにおっしゃるキリストがおられるからこそ祈れるのです。神様の胸倉をつかんで、神様なんてこんなことをなさるのですかと食ってかけられる、それがどんなに素晴らしいことか。弱いかから祈るではありません。祈りは独り言ではありません。

祈れない、信じられないという方に申し上げます。祈れるようにしてください、信じたいと祈ってください。その祈りもしないで、祈れませんが信じませんありません。本当に神様に向き合っ、あなたを信じさせてください、あなたに祈るものにしてください、そうやって祈っていきましょう。

私たちは祈れなくなることがあるかもしれませんが。信仰がなくなること、認知症になって祈る言葉が出ないことも起こるかも知れません。しかし、その時になって祈りの言葉が出てこなくなったとしても主イエスが私のために祈ってくださることを、いま私は信じています。

主の祈りをゆっくりと祈ってください。もし疑問点が出てきたら、その疑問点を大切に、それも祈っていただきたいのです。神様、本当はどうなんですか、あなたは私にそれをしなさいとおっしゃるのですか。私にはできません。しかし、もしそれが本当にあなたの御心であるならば、それをする力を下さいと祈る、それが祈りです。時には、神さまもういいです、これ以上は耐えられません、そういう叫びになることもあります。そちらの方が多くいます。しかし、出てきた思いのすべてを神にぶつけられること、それも主イエスを信じることの恵みです。信仰にはコツはいりませんが、呼吸があります。それが祈りです。祈りましょう、「天にまします我らの父よ」と。

(記 説教要約奉仕者)